Global Letter NEXT 創設1周年 コラム

魯迅の写真

～　日中国交正常化50周年に寄せて　～

魯迅と江沢民　～中国人にとっての仙台

仙台市中心部にある「米ケ袋一丁目公園」をご存知でしょうか？

今年開園した新しい公園ですが、この場所には中国の小説家であり思想家であった魯迅が、今から約120年前、仙台医学専門学校（現東北大学医学部）に留学した際、一時下宿していた宿が存在していました。

仙台市は魯迅の足跡を伝える公園として整備し、4月に開園しましたが、今年が日中国交正常化50周年の節目の年ということも何か縁を感じます。

米ケ袋一丁目公園

この公園と道路を挟んだ反対側に東北大学片平キャンパスがあり、1998年11月29日中国の最高指導者であった江沢民国家主席がそこを訪れました。江沢民は片平キャンパス内に残る「魯迅の階段教室」を視察し、魯迅がよく座っていたといわれる席に座っています。

魯迅の階段教室
（旧仙台医学専門学校六号教室）

魯迅の仙台留学時代の恩師藤野厳九郎氏との関係や、医学から文学に志を変えるきっかけとなった、いわゆる「幻灯事件※」については、小説「藤野先生」に記されています。「藤野先生」が中国の教科書に掲載されたことが、「中国人にとっての仙台」のイメージを形作ったといえます。

江沢民も階段教室で魯迅の学んだ当時に想い巡らせたことでしょう。

※海外ビジネス情報誌Global Letter Vol.2（2015年11月発行）に幻灯事件や魯迅の足跡などをまとめたコラム「魯迅と仙台」を掲載しています。
https://www.77bank.co.jp/pdf/kokusai/globalletter/gl_vol02.pdf#zoom=100

写真屋とデジカメ　～日中の経済格差

「江沢民訪日・訪仙」の事実を、私は派遣先の北京で知り、魯迅の影響力の大きさに驚いたことをよく覚えています。

1998年の北京は、オフィス街には高層ビルが林立していたものの、中心部を少し外れると、未舗装の道路や昔ながらの住宅も残っていた時代です。

当時の日本と中国の経済発展の差を体感する出来事がありました。北京の有名な観光地の天安門広場では、毎朝日の出後に「昇旗」いわれる「国旗掲揚式」が行われています。天安門から出てきた「国旗護衛隊」が、一糸乱れぬ隊列のまま、自動車の通行を止めた大通りを渡り、天安門広場で中国の国歌に合わせて国旗を掲げる儀式です。

（この儀式を見たあと、毛主席記念堂で毛沢東のご遺体に献花するのが定番の観光コースでした。）

Copyright © The 77 Bank, Ltd. All rights reserved.

私も「昇旗」を見学するため、天安門に掲げられている毛沢東の肖像画を背にしながら、多くの中国人観光客と一緒に夜が明けるのを待っていました。暗闇の中、日本から持ってきた液晶画面付きデジタルカメラ（カメラの性能は30万画素程度だったと記憶しています）を掲げ、試し撮りを始めたところ、周りの人々の視線が明らかに私個人に集中していることに気が付きました。

当時、中国の地方では、カメラを保有している人はあまり多くない印象でした。実際、天安門で私と一緒に夜明けを待っていた中国人観光客の多くはカメラを持っていませんでした。写真といえば、観光地で露店の写真屋に撮影してもらうことが一般的だった時代に、撮影後すぐに画像を見ることができる「デジカメ」を初めて目にした人々の衝撃は大きかったのでしょう。「それは何だ」「私も撮ってくれ」「撮った写真がほしい」などと多くの人に求められ、私の周囲が騒がしくなりました。自分史上一番他人の注目を集めたと言ってもよいあの瞬間が、私が体感した「日本と中国の経済格差のピーク」だったと今でも思っています。

翌年に私は日本に帰国したのですが、帰国前日、中国の友人に自分が使っていたフィルムカメラをプレゼントしたところ、「日本人はカメラを何台も買うことができる。でも、私はカメラを買うことができない。これが今の中国と日本の大きな違いだ」と言われたことが、未だに忘れられません。

北京・天安門近くで訓練中の国旗護衛隊の様子（1998年）

経済成長と好感度低下　～静かな50周年

その後の中国の経済発展について、詳しい説明は必要ないでしょう。改革開放政策が、安い労働力を目指した中国進出ブームを後押し、2001年のWTO加盟も進出に拍車をかけました。

地元企業の中国進出も増加し、2005年に弊行はお取引先の中国ビジネスをサポートするため「上海駐在員事務所」を開設しています。

そして、私が天安門でデジカメを誇らしげに構えていた時代からわずか12年後の2010年、中国のGDPは日本を抜き、米国に次ぐ世界第２位の経済大国に成長しました。

その頃には中国でデジカメやスマートフォンを持つことは特別なことではなくなっており、日本製高級一眼レフカメラを首からぶら下げている人の姿もよく見かけるようになっていました。

上海・外灘から見た浦東地区（1998年）

上海・外灘から見た浦東地区（2022年）

Copyright © The 77 Bank, Ltd. All rights reserved.

2021年に内閣府が実施した「外交に関する世論調査」では、「中国に対し親しみを感じる」とする人の割合が20.6%と、大変低い結果となりました。また、公益財団法人新聞通信調査会が今年2月に公表した「日本に対する好感度」の調査でも、中国で「好感が持てる」と答えた人の割合は、前回比13.4ポイント減の26.3%と大幅に低下しました。

一方、好むと好まざるとにかかわらず、私たちが中国製のモノを、買ったり、使ったり、食べたりしない日はないといえるほど、日中関係は結びつきを強めています。

弊行お取引先の海外拠点に占める中国拠点の割合も、4割以上と圧倒的に多く、お取引先は直接・間接問わず、何かしら中国とビジネス上で関わりがあるといっても過言ではないでしょう。

上述の内閣府の調査でも、「今後の日本と中国との関係の発展」について、日中両国や、アジア及び太平洋地域にとって「重要だと思う」と回答した人の割合は、78.7%となっており、「ゼロチャイナ」のような極端な動きは、現実的な解とはなり得ないと思われます。

このような状況下、コロナ禍の影響もあり、日中国交正常化50周年の節目の日である2022年9月29日は、静かに淡々と過ぎていきました。

藤野先生の写真　～新たな50年へ

藤野厳九郎（1874～1945）
（東北大学史料館蔵）

最近の日中関係を見ていると、「藤野先生」が今も中国で教材として使われているのか？と心配になりました。弊行上海駐在員事務所に教科書を入手してもらったところ、最新版の中学生用の教科書に今も本人の写真とともに掲載されていることが確認できました。

その写真は、1906年魯迅が仙台を離れるときに藤野先生が直接魯迅に手渡した写真で、裏面には「惜別　藤野　謹呈　周君」との記載があります。(魯迅の本名は周樹人)

魯迅は、北京の自宅（北京魯迅博物館敷地内に魯迅故居として現存）の東側の壁（日本の方向）に写真を掲げていたと記しています。

日中関係は、依然難しい局面が続いていますが、毎年中国の若者が魯迅の作品を通じて、藤野先生という日本人の名前と顔を記憶していることは紛れもない事実です。

魯迅の作品と100年以上前の１枚の写真が、これからも日中の橋渡しの役割を担い続けてくれると信じて止みません。

日本と中国の新たな50年はスタートしたばかりです。

（市場国際部　入江　恵一郎）

七十七銀行の海外ビジネス情報サイト「Global Letter NEXT」は、2022年11月に創設１周年を迎えました。
今後も、弊行海外派遣行員からの現地の最新トピックスなど、皆様の海外ビジネスに役立つ情報を発信してまいります。

【お問合せ先】
七十七銀行 市場国際部 アジアビジネス支援室
TEL.022－211－9880

【Global Letter NEXT ホームページ】
その他の記事はこちらからご覧ください。
https://www.77bank.co.jp/kokusai/globalletter_next/

本紙記載の内容につきましては、当行が信頼できると考える情報に基づき作成しておりますが、その正確性、信頼性、完全性を保証するものではございません。法律上、会計上、税務上の助言を必要とされる場合は、それぞれの専門家にご相談いただくようお願い申し上げます。

Copyright © The 77 Bank, Ltd. All rights reserved.